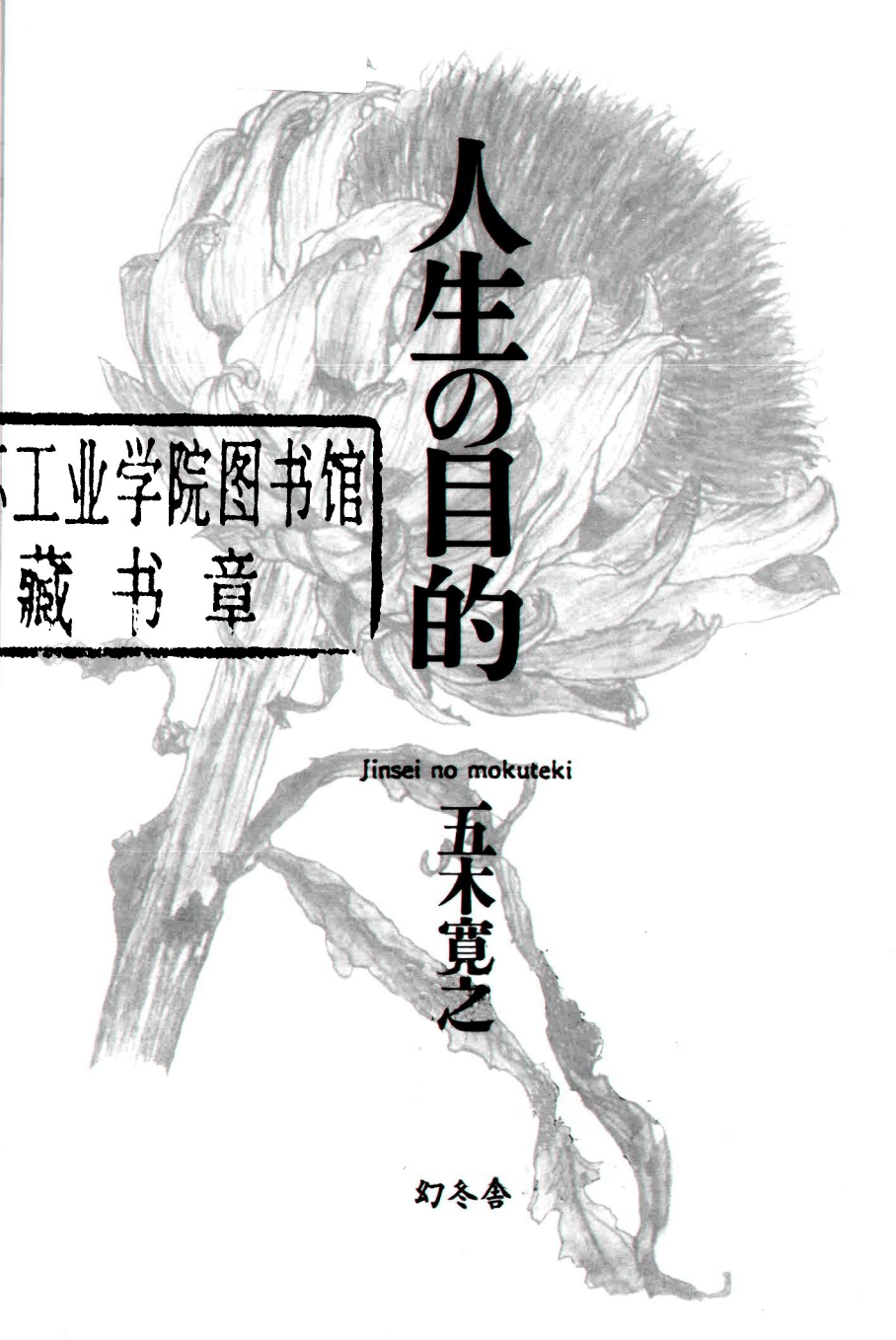


人生の 目的

五木寛之

Jinsei no mokuteki





工业学院图书馆
藏书章

人生的目的

Jinsei no mokuteki

五木寛之

幻冬舎

五木寛之(いつきひろゆき)

昭和7(1932)年9月福岡県に生まれる。生後まもなく朝鮮にわたり22年引揚げ、27年早稲田大学露文科に入学。32年中退後、PR誌編集者、作詞家、ルポライターなどをへて、41年「さらばモスクワ愚連隊」で第6回小説現代新人賞、42年「蒼ざめた馬を見よ」で第56回直木賞、51年「青春の門」筑豊篇ほかで第10回吉川英治文学賞を受賞。56年より一時休筆して京都龍谷大学に学ぶ。代表作に「デラシネの旗」「戒厳令の夜」「風の王国」などがあり、エッセイ集「風に吹かれて」は総数400万部に達するロングセラーになっている。小説のほか音楽、美術、歴史、仏教など多岐にわたる文明批評的活動が注目されている。近著に「蓮如—われ深き淵より—」「生きるヒント」シリーズ、「他力」などがある。平成10年、弊社より発行の『大河の一滴』は大きな反響をよんだ。



©HIROYUKI ITSUKI, GENTOSHA 1999

人生の目的

平成十一年十一月十一日 第一刷発行
平成十一年十一月二十五日 第二刷発行

著者 五木寛之



発行者 見城 徹

発行所 株式会社幻冬舎

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
電話：03(5411)6211(編集)
03(5411)6222(営業)
振替：00120081767643

印刷所 中央精版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

検印廃止 AD・三村淳 装画・五木玲子

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。
小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写
複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害
となります。定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan ISBN4-8728-338-2 C0095

人生の目的

目
次

なぜいま人生の目的か 11

胸につきささる事件のこと 13

あたりが暗くなってきたという感覚 16

なぜ自殺者が劇的に急増したか 19

雨にも負け、風にも負け、それでも生きつづける 21

人生に目的はあるのか 23

人間とは不自由な存在である 26

才能が開花するのも運命ではないか 30

努力と勇気も天与の資質という考えかた 33

生まれること、その不公平な出発点 36

人生の目的を考える必要のなかった時代 39

希望や努力で克服できない「宿命」をどうするか 42

はつきりした人生の目的をもつ人 45

人間としての共通の運命 46

同じ運命を背負った者の自然な感情 49

人はなぜ人を殺すのか 52

生きること、生きつづけることこそが 62

肉親について 71

絆は人間にとって厄介なものか 73

これからは手に職をつけるのがいちばんだ 76

若さは常に残酷で身勝手なものである 79

肉親の消滅を願う自分の浅ましき 81

世間の絆きずなから解放される道 84

へ家へという精神的連続性は解かれたか 86

へ個へのインド文化、へ家への中国思想 88

個の確立と個の孤独 92

私たちは永遠に絆きずなから逃れられない 94

金銭について 97

五十一円から八十円への人生 99

ふたたびへ貧乏への時代がやってくる 101

金のために身を屈する人間は金を憎む 105

どこまでも人間でいたいから金を浪費する心理 107

つよく夢みれば実現するか 109

「心の貧しい人」と「貧しい人」 114

仏はまずへ悪人へを救われる 116

宗教にのぞむもの 120

金の世の中を馬鹿にしてはいけない 123

信仰について 127

自己に自信をもつということ 129

日本人の罪の意識は深く長い 132

性のタブーを超えて 135

仏の教えは誰のためにあるのか 137

すべての人間にできること 139

不合理ゆえに吾れ信ず 141

へよきひとゝとの出会いなくしてへ信へへの道はない 145

遠くに見える灯火に励まされて 147

わが人生の絆 151

こころの絆

セイタカアワダチ草の眺め 156

大和に咲く異邦人 エトランジェ の運命	162
小学校の教師だった父と母	165
郷里を離れ、野心にみちて朝鮮半島へ	167
坂の上の雲をめざして	170
満州の丘に立ちて	175
地平線に沈む夕日	177
敗戦で崩れ去った父の野心	180
内地での生活	184
深いため息をつく父	186
坂道をくだってゆくとき	190
親が子に伝える大事な遺産	193

学校の絆きずな

転校生という烙印ろういんを背負って 199

肉体的な記憶という学習 203

新しいデモクラシーの旗印はたじるしのもとに 207

男性中心の教育のなかで 210

二度目の、坂の上の雲をめざして 215

戦後という劇的な日々に出会った歌 218

異国に心惹ひかれて 224

新しい世界へのいとぐち 227

自由な天地へのあこがれと郷愁きようしゆう 229

青春の絆きずな

忘れられない先生との出会い 235

お金に困って本を手放す 242

貧しさのなかにこそ魂を震撼しんかんさせる体験がある

246

淡々としたつきあいのなかで感じる絆きずな 250

人間の絆きずな

極限状態に生きのびた人間の知恵 257

苦しいときに口ずさんだ歌 260

人は子供に育てられる 263

いま与えられてあるものに満足する

生きているあいだにまとめたい物語

267 265

目に見えない新しい風景

271

あとがきにかえて

274

なぜいま人生の目的か

胸につきささる事件のこと

悲惨な事件ひきまといえ、これほど悲惨な事件はない。つい先ごろ亡くなられた中村元さんはじめの著書『自己の探究』（青土社・一九八八年刊）のなかで紹介されている、ある心中事件のことである。

一九七七年の事件だから、いまから二十数年前のことになる。その年の四月十三日の新聞に記事が出たそうだが、私の記憶にはない。たぶん何かの理由で見落としてしまったのだろう。

中村さんはその記事の内容を、こんなふうに要約されておられる。《運命の共感から愛情へ》という章の一部であるが、その箇所かしよだけを抜きだして引用させていただく。

へ（前略）東京都板橋区高島平たかしまだいらの団地の高層建物から、合板会社の工員、山中了さんさとると、長男の小学校四年生、敏弘君（九つ）、次男の同一年生、正人君（六つ）が、飛び降り自殺

をした。父親は二人の子を抱きかかえるように死んだ。父親は妻に蒸発され、まじめに働いていたが、子どもの世話で「疲れた」といつていたという。父親のズボンのポケットには一〇円銅貨が一枚残っていただけであつたということが、背後の事情をものがたつていた。こどもの手帳には、

「おかあさん、ぼくたちが天国からおかあさんのことをうらむ。おかあさんもじ国（地獄）へ行け、敏弘、正人」

と書いてあつたという。（後略）

いまさら書くまでもないことだが、中村元^{はじめ}さんはインド哲学の世界的な権威^{けんい}者^{しや}でいらした。仏教思想研究の大家でもあり、人間の生と死に関する考察も多い。私にとつては雲の上の人だった。その大学者の中村さんが、この世俗的な事件の記事に^ふ触れて、

「胸をしめつけられた」

と率直^{そつちよく}に述べておられることに、私はわけもなく感動した。また、こうも書かれてい